

吉備国際大学研究紀要  
(人文・社会科学系)  
第24号, 43-51, 2014

## 幼児教育現場における英語活動

－保護者の捉え方に見る課題－

秀 真一郎

**English activities in Early Childhood Education Fields  
- The subjects in the way Parents' views -**

Shinichiro Hide

### Abstract

This paper is aim to research the English activities in Early Childhood Education fields. Also, it is considering the subject the way Parents' views in the Education activities in Early Childhood Education fields. It is getting popular to have English activities in Early Childhood Education fields. Of course, the parents whose children participate the English activities also have some thoughts about it. The relative research which we have already done get many interesting thoughts about the English activities in Early Childhood Education fields. Especially, the last question that asks parents the opinion with free writing had very significant thought about it. In this paper, this answer has been focused for making sure how the English activities in Early Childhood Education fields should be. The cluster analysis has been used. Each opinion should be divided in to 5 clusters. Considerations that come from 5 clusters will meaningfully verify the subjects which the English activities in Early Childhood Education has in the way Parents' views.

**Key words** : English activities, Early Childhood Education, Parents

**キーワード** : 英語活動、幼児教育、保護者

## 1. はじめに

平成24年8月に「子ども・子育て関連3法」が成立した。3法の趣旨としては、幼児期の学校教育・保育、地域の子ども・子育ての支援を進めていくというものである。子ども・子育て関連3法を制定した経緯には、急速な少子化、結婚・出産・子育ての希望がかなわない現状、子ども・子育て支援が質・量ともに不足、などの様々な理由が混在することに起因する。

子ども・子育て関連3法の成立により既存の問題がすべて解決するとは言いがたく、やみくもに教育・保育の場を増やすことでは、何の解決にもならない。当然ながら、質の高い幼児期の学校教育・保育の総合的な提供は不可欠なものとする。

いかにして質の高い幼児期の学校教育・保育を確保していくのかという点に関しては、様々な視点が設けられながら、幼児教育現場では求められるニーズへの対応に迫られている。ここで挙げられるニーズは多様化してきていることにも注目しなければならず、日々の保育内容や行事にまで及んだニーズはまさに幅広いものとなっている。体操教室やサッカー教室は幼児の体力低下に対する取り組みとしてあげられ、書道教室・絵画教室・鼓笛隊と言った芸術分野にまで広がっている。

幼稚園や保育所においては、頻度こそ違いが英語活動を取り入れることで、園児と英語の接点を作っていることはよく知られている。ここには小学校における英語の必修化を意識した結果の取り入れと見ることも出来る。しかし、この幼児教育現場と英語教育・英語活動との接点は近年に始まったものだけではない。小学校において「外国語活動」が導入される以前から取り入れている幼児教育現場は多く、実際はその歴史が長いことは意外と知られていない。

そんな中、幼児教育現場における英語活動の意義に関して、上野(2006)は英語活動と子どもの発達における関係という視点から考察している。さらに、田中・

古茂田(2007)は、幼稚園における英語教育の実践例について明らかにし、福士・成田・坂本(2009)は、保育所まで含めて分析を行っている。先述したように、幼児教育現場において英語教育・英語活動を取り入れる理由は様々であり、従ってその目的も様々である。鈴木(2004)は、早期英語教育の賛成意見と反対意見をまとめている。まとめられた意見は多義にわたっており、そのどれもが現在英語教育・英語活動を取り入れている幼児教育現場の抱えている問題ではないだろうか。

しかしそのような幼児教育現場の持つ背景と同じくして、自身の子どもが受ける保育内容に対して、保護者がどのような意見を持っているのかという視点も、決して無視出来ないものである。そこには鈴木のまとめた早期英語教育の賛成・反対意見と何らかの関係が存在するかもしれない。そこで、こうした蓄積にも依拠しながら、幼児教育現場において展開される英語活動に対する保護者の考え方や捉え方を明らかにするため、先行研究としてアンケート調査を実施した。

保護者が英語教育に対する様々な意見をもっていることに注目し、保護者における幼児教育現場での英語活動の捉え方について探ることとした。

## 2. 方法

関東・東海・中国の各地方における都市部に在在する幼稚園・保育所8か所を対象に、英語活動を行っている幼児(3・4・5歳児)の保護者へのアンケート調査を行った。アンケート調査においては、21のアンケート項目を設定した。21のアンケート項目を含めたアンケート用紙は以下の通りである。

「幼児の英語教育」についてのアンケート

このアンケートを持ち帰ったお子さんについて (該当する ( ) に○印を付けて下さい)

1. 学年は ( ) 3歳児クラス ( ) 4歳児クラス ( ) 5歳児クラス
2. 性別は ( ) 男児 ( ) 女児
3. 習い事はなさっていますか。( ) 2つ以上 ( ) 1つ ( ) やってない
4. 習っているもの ( ) に○印を付けて下さい。(複数回答可)  
 ( ) ピアノ ( ) 音楽教室 ( ) エレクトーン ( ) バイオリン  
 ( ) バレエ ( ) 体操 ( ) 水泳 ( ) 剣道  
 ( ) 柔道 ( ) 空手 ( ) サッカー ( ) 英語・英会話  
 ( ) 習字 ( ) そろばん ( ) 絵画  
 ( ) その他 ( )
5. 小学校に兄弟がいますか。( ) 人います。  
 1人目 ( ) 年生 小学校で英語を ( ) 学習している ( ) 学習していない  
 2人目 ( ) 年生 小学校で英語を ( ) 学習している ( ) 学習していない  
 3人目 ( ) 年生 小学校で英語を ( ) 学習している ( ) 学習していない

＜回答して下さっている方について (該当する ( ) に○印を付けて下さい)＞

6. これを書いて下さったのは?  
 ( ) お母さん ( ) お父さん ( ) 他 ( )
7. これを書いて下さった方の年齢は?  
 ( ) 10代 ( ) 20代 ( ) 30代 ( ) 40代  
 ( ) 50代 ( ) 60代以上
8. 貴方は学生時代英語が  
 ( ) 得意だった ( ) 普通 ( ) 苦手だった
9. 貴方は現在英語が  
 ( ) 好きである ( ) どちらでもない ( ) 嫌いである
10. 家族で英語の話題が  
 ( ) よく出る ( ) 出る ( ) あまり出ない ( ) 出ない

＜裏へお読み下さい＞

＜アンケート調査＞

11. 昨年度より小学校で外国語 (英語) が教えられるようになりました。知っていましたか。  
 ( ) よく知っている ( ) 知っている ( ) あまり知らない ( ) 知らない
12. 小学校で外国語 (英語) を教えることをどう思いますか。  
 ( ) とても良い ( ) 良い ( ) あまり良くない ( ) 良くない
13. 幼稚園や保育園で外国語 (英語) を指導することをどう思いますか。  
 ( ) とても良い ( ) 良い ( ) あまり良くない ( ) 良くない
14. 上の第13問でそのように思うのはどうですか。  
 [ ]
15. お子さんは園で英語の指導を受けていますか。  
 ( ) はい ( ) いいえ ※「いいえ」と答えた方は第17問へ。
16. お子さんは園での英語の指導を喜んでいますか。  
 ( ) 大変喜んでいる ( ) 喜んでいる ( ) あまり喜んでいない ( ) 喜んでいない
17. 幼児から英語に慣れると、将来役立つと思いますか。  
 ( ) そう思う ( ) やや思う ( ) あまり思わない ( ) 思わない
18. 上の第17問でそのように思うのはどうですか。  
 [ ]
19. 英語以外の外国語で、お子さんに学ばせたい外国語はありますか。  
 ( ) ある ( ) ない ※「ない」と答えた方は第21問へ
20. それは何語ですか。( ) 語 ( ) 語
21. 幼児の英語教育について、その他ご意見をお書き下さい。  
 [ ]

今回はその中で21問目に設定した「幼児の英語教育に対する自由記述」に着目した。この自由記述にこそ、それぞれの保護者における幼児に対する英語活動の捉え方が顕著にあらわれ、かつ幼児教育現場における英

語活動に存在するキーワードが浮き彫りとなる部分と考える。一つ一つの有効回答を熟考し、有効回答により8つのキーワードを導き出した。導き出した8つのキーワードは以下の通りである。

1. 幼児
2. 英語
3. 早期
4. 習慣
5. 将来
6. 遊び
7. 楽しみ
8. ネイティブ

その後、さらにそれぞれの有効回答の中に、8つのキーワードに関する内容が含まれているかを調べ、各キーワードに対する否定的な捉え方に1、どちらでもないに2、肯定的な捉え方に3の得点を与えた。8つのキーワードごとに1~3の得点が与えられることで、各有効回答に対してすべての有効回答を総合的判断から導き出す階層クラスタ分析にかけることが可能となる。そこで、8つのキーワードに対する得点を与えた後の有効回答に対し、階層クラスタ分析 (Ward法) を行った。これにより、英語活動に対する保護者の捉え方に、どのような傾向があるのかを把握できるものと考えた。

3. 結果

6幼稚園・2保育所の保護者にアンケートを実施し、全アンケート回答の中から、604件の自由記述における有効回答が得られた。これを階層クラスタ分析にかけた結果、5つのクラスタに分けることが妥当であると判断される結果が導き出された。そして、5クラスタに分類し各クラスタの平均値を算出したものが、次頁の『【表】各クラスタの平均値』である。

次頁の【表】の結果から見出されたそれぞれのクラスタには、ある程度の特徴を見出すことができた。そして、それぞれのクラスタに対して、次のような命名を行った。

- 第1クラスタ: 幼児の英語活動に対して肯定的
- 第2クラスタ: 早期の英語活動に対して懐疑的

第3クラス： 早期から習慣・慣れ・触れる機会重視

第4クラス： 遊び・楽しみ重視

第5クラス： ネイティブ重視

#### 4. 考察

今回のアンケートにおいて、幼児教育現場での英語活動に対する保護者の率直な意見を、保護者の英語活動の捉え方と位置づけた。8つのキーワードにおける顕著な違いを考える中で、全体指数を5つのクラスタに分けることで明らかとなった。そのあらわれが各クラスタに対する命名となっている。そこで、それぞれのクラスタに対して自由記述を含めて考察をし、幼児教育現場における英語活動に対する保護者の捉え方について考える。

##### (1) 幼児の英語活動に対して肯定的クラスタ

第1クラスタにおいては、「幼児」「英語」が3.00という平均値を示し、他の項目においてはほぼ2.00という特徴のあるクラスタである。自由記述からは一概に保護者のすべての捉え方は読み取れないが、全般的に

肯定的な捉え方をしていることがあらわれている。こういった点においてもやはり、【表】にあるように他の項目がほぼ2.00という点にあらわれていると言える。

幼児の英語活動に対して肯定的な当クラスタにおける背景は実に様々で、保護者の個人的考えや経験からくる子どもに対する期待、現在や未来の社会情勢からくる観測的期待、個人的経済事情等があげられる。しかし、一様に言えることは「我が子が英語に慣れ親しみ、将来的に英語を使いこなすことでグローバル社会を生き抜く存在になってほしい」という、期待のあらわれと考えることが出来る。

各自由記述内容は幼児教育における英語活動を肯定的に捉えている意見ばかりのクラスタとなるが、その肯定的捉え方は“我が子＝英語”の接点に対する捉え方は同じであっても、その理由と活動を経験することからくる期待は多様と言える。中には、「頭の柔らかいうちから・・・」というような幼児期の子どもの吸収力に注目し、英語力の向上を期待する肯定意見や、課外での英語活動の費用高に対する懸念によって、幼児教育現場での実施に肯定的意見を持つ保護者もあった。

【表】各クラスタの平均値

クラスタ (回答数/比率)	幼児	英語	早期	習慣	将来	遊び	楽しみ	ネイティブ
第1クラスタ (208/34.4%)	<b>3.00</b>	<b>3.00</b>	2.25	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00
第2クラスタ (73/12.1%)	<b>2.29</b>	<b>2.47</b>	<b>1.88</b>	2.07	2.04	2.00	2.10	2.05
第3クラスタ (110/18.2%)	<b>3.00</b>	<b>3.00</b>	<b>2.46</b>	<b>2.82</b>	2.35	2.00	2.02	2.00
第4クラスタ (144/23.8%)	<b>2.97</b>	<b>3.00</b>	2.17	2.13	2.06	<b>2.38</b>	<b>2.81</b>	2.04
第5クラスタ (69/11.4%)	<b>3.00</b>	<b>3.00</b>	2.25	2.28	2.13	2.00	2.09	<b>3.00</b>
全体 (604/100.0%)	2.91	2.94	2.22	2.22	2.10	2.09	2.22	2.13

## (2) 早期の英語活動に対して懐疑的クラスタ

このクラスタで着目できる点は、他に類を見ない「幼児」と「英語」における数値の低さと、「早期」において項目全体から見ても唯一の2.00を下回っているところである。この点から見ても、今回の調査において、これほどまでにはっきりとした形であらわれている点は他にはなく、このクラスタにおける注目しなければならないポイントと言える。そこで、このクラスタでは早期の幼児における英語活動に、否定はしないが肯定もしないという懐疑的な捉え方とする。そこには、当クラスタにおける記述内容が関わっていると言える。

ここでいう否定もしくは懐疑的意見とはどういうものとなるのか。個別記述内容においては、英語よりも基本的な生活習慣や日本語を重視するという意見が見られ、子どもたちの今の生活を大切にするという捉え方が見られた。その裏には、幼児自身における生活基盤となる日本の文化や日本語、そして日本での基本的な生活習慣がまだ十分に身に付いていない中で、英語という異なる文化や言語への関わりに必要性を見出すことが出来ないというあらわれと考えられる。

また、現在の英語活動による英語習得に疑問をもつ点から、懐疑的な捉え方をしていることも伺える。母国語である日本語もまだ十分ではない子どもが英語を身につけることへの疑問のあらわれではないだろうか。そのことを顕著に表している意見として次のようなものがある。

「母国語の力（国語力）以上に、外国語の力がのびることは無い、と感じているので英語教育の前に母国語の力を出来るだけ幼児期に伸ばしたいと思います。その上で、より外国語が必要だ！と感じる社会になれば、自然に必要性を感じて自ら学ぶ人は学ぶと思います。」

「正しい日本語をまずマスターさせたい。」

これらのように日本語力の重視と高い日本語力による他言語習得の道筋、そしてなにより幼児期の子ども達にはもっと大切なものがあるという考え方が、この懐

疑的意見の基盤となっているとみることができる。

## (3) 早期から習慣・慣れ・触れる機会重視クラスタ

第3クラスタにみられる特徴は、他のクラスタに比べ「早期」の平均値が高いとともに、「習慣」における平均値が3.00に近いという点が挙げられる。これは、幼児教育における英語活動に対して肯定的に捉えているということが言え、さらに早期からの習慣的取り組みを望む捉え方をしていると考えることが出来る。

早期取り組みにも様々な意味合いが含まれると考えられ、その理由としては保護者自身の生育経験によって必要性を感じているという記述や、幼児期からの経験が小・中・高での英語学習へスムーズな移行を生み出すという理由が挙げられていたからである。さらには、幼児期の成長発達における“様々なことに対する吸収力”の高さを言及し、英語に対する早い取り組みを肯定している意見も見受けられた。

このクラスタでは早期取り組みを念頭に置き、より高密度な習慣化を願う記述も多数挙げられていた。やはり一過性のもものではその習熟度が薄いという考えから、月一回から週一回へ、週一回から毎日へと取り組み頻度を高める期待が記されていた。幼児期の英語と触れ合う頻度の高まりが習熟度の高まりと結びつき、習熟度の高まりが英語という言語の将来的操作性へ繋がるという期待のあらわれと見ることができる。

実際に幼児教育現場での英語活動だけでなく、各家庭独自の取り組みとして、個人レッスンや英語の学習塾へ通わせている保護者の意見も多く見られるクラスタであった。そのような保護者からの意見として、将来のグローバル社会を視野に入れた結果という記述が多く見られた。そして、この見解は当然幼児教育現場で行われている英語活動にも期待されており、早くに触れることで他言語に対するネガティブな印象を払拭出来ると考えられている。

#### (4) 遊び・楽しみ重視クラス

このクラスでは、「幼児」・「英語」・「楽しみ」における平均値が3.00に近い点に着目すべきであろう。また、他の項目よりも高い値が見られる「遊び」にも注目できる。つまり、英語活動に対する取り組み方として、「遊び・楽しみ重視」という考え方が伺える。このことから当クラス名が可能と考えた。英語活動に対する“遊び・楽しみ”という捉え方から、保護者のどのような考え方が見られるのであろうか。

そこで、自由記述の内容に着目してみる。自由記述の内容には、幼児期の英語活動に肯定的であると同時に、“科目としての英語”ではなく、楽しく遊びながら行う、“活動としての英語”という捉え方が主立ったものと言える。このような記述の根底には、「幼い頃からの“英語＝楽しい”という図式が存在することによって、将来本格的に英語と関わる時に抵抗感なく取り組めるのではないか」という思いが見える。そして、“親しむ”“抵抗なく”“勉強ではなく”というキーワードとも取れるような言葉が随所に見られ、英語活動との関わりを遊びの一環として楽しく取り組んでほしいという思いが伺える。そのことに付随するように、記述には「押しつけ」や「無理矢理」ということばが否定的に使用され、英語とのかかわりを強制的であってほしくないという捉え方もされていた。

これらの記述の裏を返せば、保護者自身の英語に対するイメージや英語との接点にマイナスイメージを持っているように予想される。保護者自らの英語に対する経験を我が子にはさせたくない、英語が大切な社会へ移行していることを感じるからこそ自身の持つ英語に対するマイナスイメージを持ってほしくない、という思いが記述内容から感じ取ることが出来る。中学校教育における文法中心の英語学習法を例に挙げ、その経験をネガティブに捉えていることから、英語の必要性を十二分に感じているからこそ、英語は楽しいという印象の大切さを強調していると感じる。

#### (5) ネイティブ重視クラス

このグループの特徴としては、【表】から分かるように、「幼児」・「英語」に対する得点がすべて3.00であり、さらには「ネイティブ」においても同様に、すべてが3.00であった。

このことから、ネイティブスピーカーによる英語活動の指導を肯定的に捉えていることが予想される。このクラス内の特徴でもある「ネイティブ」ということばの背景には、いくつかの意味が存在しているようである。

個々の記述に、「本物」・「正しい」・「きちんとした」という発音に関する記述が伴っていた。保護者自らの発音の苦手さからくるものや、会話中心の活動＝ネイティブスピーカーという図式が必然的にあらわれるようである。このような記述の意図として、ネイティブの発音に触れ、慣れることで英語における“会話”に有利かつ、将来につながるという捉え方が見られた。

さらには、ネイティブスピーカーに対して、英語活動の質という観点だけではなく、肌や髪の色、背景にある文化の違いに触れることで偏見等をなくす機会になるという捉え方も存在した。幼児期における経験によって、違う文化背景を持った人に対しても抵抗なく接することが出来るのではという考えも存在した。ネイティブスピーカーによる英語活動を実際に受けている我が子の様子を、“英語の時間だけ会える外国人先生に、子どもは興味津々”と表現するほど肯定的に受け取っている様子がうかがえる。

しかし、当クラスにおいて最も注目すべき点は、記述内の過半数を占める「ネイティブの先生がいい」という単純な記述である。そこにははっきりとした理由が記載されてはおらず、その背景にある意味は一つに絞ることは出来ない。日本人英語教師ではなく、ネイティブスピーカーには存在するものと考えたと、先述した「見た目」という外見的差異による影響も含まれていると考える。しかし、過半数にも及ぶ「ネイティブスピーカー賛成論」には英語における“発音”と

“聞き取り”の意味するところは大きいのではないかと考える。日本語には存在しない発音の難しさを実感するからこそ、より克服するにあたっての近道として「ネイティブスピーカー賛成論」が強く押し出されているのではと感じる。

## 5. まとめ

今回は 604 件の自由記述に含まれる、保護者の幼児における英語活動の捉え方に着目した。まず始めに、保護者に対するアンケートそのものの回収総計が 1834 件に上ったことに驚かされた。もちろん、協力いただいた幼稚園・保育所の回収努力によるものと考えられるが、それと同時に保護者の持つ幼児教育現場における英語活動に対する関心の高さが、この回収率の高さに繋がったのではないかと考える。

さらに驚かされたのは、今回の研究に至った経緯の主たる理由と挙げられるが、604 件という有効自由記述数の多さである。自由記述数の数量はアンケートのテーマでもある幼児教育現場と英語活動、どちらか一方もしくはその両方に対して高い関心と確固たる考えの象徴とも言えるのではないだろうか。回収したアンケート回答のうち、約 3 分の 1 の保護者が「幼児の英語教育（英語活動）」について何らかの意見を持ち、期待を寄せていることは大変興味深いものと言える。

多数の肯定的意見という結果に対しては、アンケート調査を依頼した幼児教育現場が、すべて英語教育もしくは英語活動を行っていたことに起因する点は否めない。この点に関しては、次なるアンケート調査を実施するにあたっての課題としてあげられ、英語教育もしくは英語活動を行っていない幼児教育現場からの結果も注目すべき点と言える。しかし 604 件という有効自由記述における「幼児の英語教育」についての肯定的意見の多さは、紛れもない事実として受け入れる必要があり、その内実も様々で肯定的意見の要因も注目すべきところである。

### (1) 保護者による経験に起因する肯定的意見

肯定的意見の中で注目すべき点はいくつか挙げられるが、まず 1 点目としては保護者自身の英語に対する経験が、幼児教育現場の英語活動に対する肯定意見にかなり反映されているところである。保護者の英語に対する経験はポジティブなものばかりではなく、ネガティブなものも含まれている。ポジティブなものとしての代表的経験は、保護者自身の英語力の高さに対する自負であり、我が子に対してもこの点に関して同じ経験を希望するからこそその肯定的意見と考える。しかし、このポジティブな経験による肯定意見は数にするとかなり少なく、ネガティブな経験からくる肯定意見が圧倒的多数と言える。

ネガティブな経験からくる肯定的意見の代表的なものは、保護者自身が英語を苦手とする、もしくは自身が受けたとされる文法中心の英語教育により、会話能力の低さを懸念する点からくるものである。自らの英語に対する経験をしてほしくないという思いが、我が子には会話を含めた英語能力の高さを求め、肯定的意見となって現れたように感じる。

### (2) ネイティブによる英語活動＝高い価値・高い質

2 点目としてあげられるのは、ネイティブ志向である。これをあらわしているのは第 5 クラスタとなり、その数こそ少ないのであるがクラスタ分析によって、幼児・英語というキーワード以外で 3.00 を挙げているからである。第 5 クラスタにおける考察でも述べたことだが、“正しい発音によるリスニング力の向上”“日本人による英語教育・英語活動＝低い質”という思いから、ここで挙げられるネイティブ志向が生まれたと考えられる。

中には理由が挙げられずに“ネイティブスピーカーによる英語教育・英語活動を望む”“ネイティブでなければならない”という意見が見受けられた。これこそ、まだまだ日本人の中に存在する“欧米文化・欧米人に対するコンプレックス”ではないだろうか。たしかに、

外見という見た目による視覚的情報は、様々な経験が大切な子ども達にとって大切な多文化教育の要素である。しかし、ネイティブによる英語活動が高い価値・高い質という点に、根拠なくイコールで結んでしまうことは大変危険な見解となるであろう。さらに言えば、このような“欧米コンプレックス”は、何の予備知識や基盤経験のない子ども達には存在しないものである。大人による勝手な思い込みや過度な反応は、子ども達が本当に必要なものや経験を奪ってしまいかねない。

### (3) 懐疑的意見に存在するもの

これまでも述べてきたように、本研究調査における幼児教育現場における英語活動に対しては、数多くの肯定的意見が存在した。そして、この多くの肯定的意見には保護者の強い思いも存在する。しかし、この肯定的意見の裏にある懐疑的意見にも強い思いがある点に注目しなければならない。

考察においても述べたように、懐疑的意見には“日本語の重視”“乳幼児期だからこそその基本的な生活習慣の重要性”を強く感じている背景が伺える。そもそも“英語を習っている子ども”とはどういう子どもなのか。

“英語を習っている子ども”は“英語を第一言語としていない子ども”を言う前提からきている。そして、懐疑的意見を述べた保護者はおそらく、この前提を念頭に意見を述べているのではないかと予想される。しかし、ここで挙げる前提とは時代が変わろうとも変化することはないものである。

グローバル社会に対応出来る子ども達の育成は、こ

れからの社会情勢を考える上で大切な要素と言える。世界各国において、世界共通語と捉えられている英語の能力をいかに高めるかという課題に対して、乳幼児期からの英語教育・英語活動の取り組みは様々で、その価値観も多様である。今現在英語教育・英語活動が成功していると見られる国の方法を、そのまま持ってきて意味がなく、それは子ども達にとって“無益有害”といっても過言ではない。

だからこそ懐疑的意見に存在するものには、日本における幼児教育と英語活動のこれからを見出す手がかりがあるように感じている。幼児教育現場において英語教育・英語活動を取り入れる意味を考えた上で、懐疑的意見に存在する様々な内容をひとつひとつ丁寧に見返す必要がある。日本全国に既存する幼児教育現場では、今現在も英語教育・英語活動が行われている。その一つ一つの内容が、各幼児教育現場の抱える懐疑的意見に照らし合わされ、見出された結果行われているものであるならば、英語教育・英語活動に託された子ども達の思い・保護者の思い・幼児教育現場の思いがしっかりと反映された取り組みとなるのではないだろうか。

### 【今回の研究調査にあたっての協力園】

千葉県：柏さくら幼稚園・鎌ヶ谷みどり幼稚園、名古屋市：国風第一幼稚園・徳重幼稚園・名古屋ひまわり幼稚園・みちる幼稚園、愛知県：立南保育園、岡山県：遍照保育園

### 参考文献

- (1) 上野めぐみ「カリキュラム考Ⅰ 幼稚園における英語活動の意義-生きる力・学ぶ力とは-」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』第6号、2006
- (2) 鈴木克義「英語を子どもに教えるな?～バイリンガルの子どもの失敗なく育てる方法～」『常葉学園短期大学紀要』第35号、2004年



- (3) 田中恭子・古茂田貴子「幼児期の英語教育について」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第 41 巻、2007
- (4) 福士洋子・成田恵子・坂本明裕「保育現場における英語活動の実態調査」『青森明の星短期大学研究紀要』第 35 号、2009
- (5) 秀真一郎「英語教育の低年齢化に関する一考察」『吉備国際大学研究紀要 社会福祉学部』第 21 号、2011
- (6) 秀真一郎・木本有香・中島眞吾・他 5 名「幼児教育現場における英語活動の実態とその方向性」『吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系』第 23 号、2013
- (7) 内閣府・文部科学省・厚生労働省「子ども・子育て関連 3 法について」平成 25 年 4 月、  
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomo3houan/pdf/s-about.pdf>